【報告】

一橋大学附属図書館における新たな読書推進活動 : 他機関・学生と連携したブックトークの実施報告

田中梓（学術情報課レファレンス係）
菅原しおり（学術情報課雑誌情報係）
山本順也（学術情報課利用者サービス係）
鈴木宏子（学術情報課）
一橋大学学術・図書部

1. はじめに

近年、大学生の読書時間が少ないことが問題となっている。2014 年 2 月に発表された調査では、読書時間ゼロの大学生（学部学生）が 4 割にも及ぶという[1]。この調査は全国大学生活協同組合連合会による調査で、全国の大学生の平均的数字と捉えられている。このような状況の中で、学生のために多くの書物に触れる機会を創出することは、図書館の使命のひとつであると考えている。

一橋大学附属図書館（以下、図書館）では昨年度、学生と連携した読書推進活動として、選書ツアーおよびビブリオバトルを開催した[2]。今年度はそれらに加えて新たにブックトークというイベントを開催した。ブックトークとは、図書館用語としては“図書館司書がグループを対象として数冊の本を紹介する読書への動機付けのための活動”（「図書館用語辞典」1982）とされており、近年は著者が著作を語る場として書店などで開催される場合も多い。今年度図書館では、著者が語るだけでなく著者と参加者との交流の場を作り、作品への深い理解とコミュニケーションを生み出すことを目的としたブックトークを 2 回開催した。この 2 回のイベントは、それぞれ他機関や本学学生との連携協働により実施された。その企画運営と成果について以下に報告する。

2. アジア経済研究所との協働によるブックトーク

2.1. 概要

図書館では平成 26 年 6 月に、日本貿易振興機構アジア経済研究所 （以下、アジア経済研究所）と協働してブックトークを開催した。概要は以下のとおりである。

タイトル	ブックトーク・著者が語る『障害と開発の実証分析』
テーマ	障害当事者を開発のプレーヤーに
日時	平成 26 年 6 月 23 日（月）17：00～19：00
場所	一橋大学附属図書館時計台棟コモンズ
講師	森壮也（アジア経済研究所開発研究センター主任調査研究員） 山形辰史（アジア経済研究所国際交流・研修室長）
主催	一橋大学附属図書館 アジア経済研究所図書館
対象図書	『障害と開発の実証分析 社会モデルの観点から』（勁草書房、2013）
参加者	35 名
その他	手話通訳付き

2.2 企画・準備

平成 26 年 1 月に図書館とアジア経済研究所との間で相互利用協定が締結された。この相互利用協定により、図書館と経済研究所資料室、アジア経済研究所の構成員は互いの図書館（室）への入館、図書館（室）を通じた現物貸借、訪問による個人貸出のサービスを受けられることとなった。同年 3 月にこの協定締結を記念してアジア経済研究所からブックトーク実施の提案があり、図書館として開催を承諾した。また、同年 5 月には一橋大学経済研究所資料室とアジア経済研究所との間でも同様の協定が締結されたことを受けて、今回のブックトークは 2 つの協定締結を記念した共同利用制度開始記念講演会とされた。

アジア経済研究所が実施概要を作成し、対象図書と講師をそれぞれ『障害と開発の実証分析』とその著者である森・山形両氏とした。また、対象図書の主題の一つである障害者への配慮から、聴覚障害者にも講演内容を伝えられるように、当日は手話通訳を手配することとした。図書館では平成 26 年 5 月に職員によるブックトークプロジェクトチームを組織した。主査は学術情報課長が務め、メンバーは課長代理の他、同課の図書情報係・利用者サービス係・レファレンス係から各 1 名の係員が参加し、合計 5 名で学内の広報活動と当日の会場設営を担当することとした。

2.3. 小展示等広報

ブックトークに先立ち、広報活動として平成 26 年 6 月 9 日（月）から 6 月 20 日（金）までの約 2 週間、図書館 1 階のエレベーター付近にてブックトークの講師とテーマに関連した図書館蔵書を集めて展示した。対象図書である『障害と開発の実証分析』の他、アジア経済研究所から提示された関連図書リストを基に、ブックトークプロジェクトチームで選定した図書合計 25 冊を展示した。展示図書は、ブックトークに関する告知が記載された帯を装着したこと以外は通常通りに取り扱い、展示中も利用者への貸出を行った。また、講演当日にはブックトーク会場内でアジア経済研究所図書室所蔵の関連図書が展示された。

写真 1　小展示の様子（於当館 1 階）

この他、広報活動として、従来の図書館によるイベント開催と同様に図書館 Web サイトと SNS でのお知らせ、学内でのポスター掲示、図書館カウンターでのチラシ配布を行った[3]。特に今回の対象図書が開発経済学を取り扱うことから、経済学部及び経済学研究科に所属する学生教職員に対しては、研究科事務室を通して重点的に広報を行った。

2.4. 開催

当日は図書館側が会場設営と受付を主に担当し、アジア経済研究所側が司会進行を担当した。ブックトークの大まかなプログラムは以下のとおりである。

16：30～17：00　開場・受付　　（30 分）
17：00～18：30　講演　　（90 分）
18：30～19：00　質疑応答　　（30 分）

当日 15：00 からプロジェクトチームを中心とした図書館職員が会場設営を開始し、定刻には受付を開始した。森・山形両講師を含むアジア経済研究所関係者は、15：00 頃に一橋大学に到着し、経済研究所、社会科学統計情報研究センター、社会科学古典資料センター、図書館の順に学内の施設を見学した。その後、講師と司会者と手話通訳者で講演について事

前打ち合わせを行った。特に、手話による同時通訳を円滑に行うため、講演原稿は綿密に確認した。

写真 2　手話で講演される森壮也講師

定刻の 17 : 00 になり、図書館の青木玲子館長と上原正隆学術・図書部長による挨拶の後、開会した。森講師は自身で手話を用いて、山形講師は手話通訳者付きでそれぞれ講演を行った。両講師から対象図書『障害と開発の実証分析』の内容をふまえながら、東南アジアの開発途上国における障害者の生計に関する調査と分析について約 90 分の講演があった。その後に 30 分程度質疑応答の時間を設けた。質疑応答は、手話通訳を考慮し、口頭ではなく質問用紙への記入によって受け付けた。質問用紙は参加者のほぼ全員から提出され、森・山形両講師がそれぞれ回答した。対象図書中の図表の読み方に関する質問や収録されている調査票の設計意図についての質問もあり、著者自身による講演ならではの質問が見られた。プログラム終了後も講師に質問を行う参加者が複数あり、参加者からの関心の高さが窺えた。

2.5. 評価

参加者アンケートでは、講演会について「役に立った」「まあ役に立った」「あまり役に立たなかった」「役に立たなかった」の 4 択の質問に対して、回答した全員から「役に立った」または「まあ役に立った」との好意的な回答が得られた。自由記述の意見・感想でも「自分が思いつかなかったような視点のご意見・ご質問を伺うことができ大変勉強になりました」「著者から直接要点の解説がされたので、本の内容がつかみやすくなりました」といった好意的な意見が見られた。また、参加者の内訳では、学外からの参加が 12 人と全参加者の約 3 割を占めた一方で、学内学生の参加は修士課程在籍の大学院生 4 人のみと比較的少人数であった。このことについて、ブックトークプロジェクトチームでは、今回テーマの取り扱う分野とその専門性によると解釈した。学内学生の参加拡大を狙ったテーマを設定していくことが次回以降のイベント開催の課題とされた。

3. 学生団体「チーム・えんのした」との協働によるブックトーク

3.1. 概要

平成 26 年 11 月に図書館では、図書のリユース活動を行う学生団体「チーム・えんのした」と協働してブックトークを開催した。概要は以下のとおりである。

タイトル	ブックトーク’14「環境史へのいざない」
日時	平成 26 年 11 月 11 日（火） 17:30～19:00
場所	一橋大学国立西キャンパス本館 1 階特別応接室
講師	斎藤修（一橋大学名誉教授）
主催	一橋大学附属図書館
協力	学生団体「チーム・えんのした」
対象図書	『環境の経済史-森林・市場・国家-』（岩波現代全書，2014 年）
参加者	50 名

3.2. 企画・準備

今回のブックトークは、平成 26 年 6 月にアジア経済研究所と開催したブックトーク・著者が語る『障害と開発の実証分析』の経験を踏まえ、図書館が主催した。

図書館は平成 26 年 9 月にブックトーク実施 WG を設置した。主査は学術情報課長が務め、メンバーは課長代理の他、同課の雑誌情報係・利用者サービス係・レファレンス係から各 1 名の合計 5 名とした。

講師は青木玲子館長が選定した。先のブックトークが、障害・開発という異なる分野にまたがるテーマであったため、今回はそれを踏まえ、学際的な研究を行っている斎藤修名誉教授（経済史・人口史）とした。斎藤修名誉教授が元附属図書館長であり、青木館長と面識があったことも決定を後押しした。斎藤修名誉教授から講演の受諾があった後、斎藤名誉教授、「チーム・えんのした」、ブックトーク実施 WG が 9 月 26 日に顔を合わせて内容や当日の進め方の確認を行った。特に、学生を主たるターゲットとすること、未読者にもわかるような内容とすること、用紙による質疑応答とすること、司会進行は「チーム・えんのした」が行うことなどが確認された。その後も、「チーム・えんのした」とは 3 回の打ち合わせを行い、斎藤名誉教授とはメールで小展示図書や内容の確認を行った。なお、斎藤修名誉教授はこの準備期間中に平成 26 年度文化功労者に選出された。

3.3. 小展示等広報

広報活動はブックトーク実施 WG と「チーム・えんのした」で分担して行った。ブックトーク実施 WG は、ポスター・チラシの作成およびその掲示・配布、図書館 Web サイト[4]・SNS[5][6]・図書館広報誌『BELL』によるお知らせ、小展示を行った。広報資料の作成にあたっては出版社と連絡を取り、紹介文の内容や書影の使用について許諾を得た。「チーム・えんのした」は SNS[7]・ブログ[8]によるお知らせ、チラシの作成・配布を行った。

また、広報活動の一環として、平成 26 年 10 月 23 日（木）から 11 月 16 日（日）まで図書館 1 階のエレベーター付近で関連図書を集めた小展示を行った。対象図書である『環境の経済史-森林・市場・国家-』の他、斎藤修名誉教授が選定した関連図書を加えた合計 20 冊を展示した。展示した図書のタイトルは書誌情報や所在とともに展示資料リストにまとめ、小展示コーナーに置いた。展示資料リストの裏面には斎藤修名誉教授自身の執筆による展示資料の紹介を掲載した。

展示図書は、ブックトークに関する告知が記載された帯を装着したこと以外は通常通りに取り扱い、展示中も利用者への貸出を行った。

写真 3　展示資料リスト及び展示資料の紹介

3.4. 開催

当日の運営には、ブックトーク実施 WG のメンバー5 名、「チーム・えんのした」の学部生 11 名が、会場設営の段階からスタッフとして携わった。開場後の主な役割を、司会 1 名、受付 3 名（うち職員 1 名）、記録 2 名（うち職員 1 名）として割り振り、その他のスタッフで適宜会場補助を行った。大まかなプログラムは以下の通りである。

17：00〜17：30	開場・受付	（30 分）
17：30〜18：25	講演	（55 分）
18：25〜18：35	休憩	（10 分）
18：35〜19：00	質疑応答	（25 分）

会場は、附属図書館時計台棟コモンズが改修工事により使用できなかったため、西キャンパス本館 1 階特別応接室とした。座席を多く確保するために、机を設置するのは最前列のみとせざるを得ず、代わりに配付資料はバインダーに挟んだ状態で筆記具と共に受付で配付した。

参加者は受付用紙によると 48 名にのぼり、途中退室や途中参加のために受付を行わなかった教職員等を含めると 50 名を超えた。事前受付だけでも 30 名弱の申込があったが、それに加え当日受付の参加者も多かったため、開会前にイスを追加で運び込む盛況ぶりとなった。遠方は九州からの参加もあったことから、学内のみならず学外からも関心を得る企画となったと言うことができる。

定刻の 17 : 30 になると、「チーム・えんのした」代表の司会進行により企画の概要説明、上原学術・図書部長による挨拶があり、開会した。講師紹介の後、斎藤修名誉教授により「環境史へのいざない」と題された講演が約 1 時間に渡り行われた。質問は予め配付した質問用紙に記入してもらう形とし、講演終了後に随時回収した。休憩時間では、講師が質問に対する回答を用意し、同時に「チーム・えんのした」が活動紹介を行った。続く質疑応答では、寄せられた質問を中心とした補足説明に加え、一問一答による質問も数問受け付けた。最後に、この度講師が文化功労者に選出されたことを祝し、「チーム・えんのした」副代表から講師への花束贈呈が行われ、閉会となった。

3.5. 評価

参加者のアンケートによれば、「著者の方から直接お話を聞けるこの企画は素晴らしい試みだと思う」、「歴史に対して視野を広げることができた」、「斎藤先生のお話を一度伺いたいと思っていたので、良い機会でした」、「初心者の私でも、とても楽しめました」といった好意的な意見が多数寄せられ、好評を得たと言うことができるだろう。

一方で、当初主なターゲットとして想定していた学部生の参加が少なかったことは課題として挙げられる。広報の面では、「チーム・えんのした」と協働したという点でより多くの学生に対する情報発信が可能になったと考えられたが、内容が学部生の興味やレベルに沿ったものであったか、問い直しが必要であろう。

また、当日の質疑応答のスタイルについては、検討の余地がある。質問用紙による質問受付は、挙手による口頭の質問より多くの質問が寄せられるという効果はあったと思われる。しかし、短い時間で質問用紙をスタッフが仕分けし講師がまとめて回答する作業が大変で

あることと、まとめて回答することで、会場との言葉のコミュニケーションが生まれにくくなることが課題となった。

写真 4　自著について語る斎藤修名誉教授

写真 5　講演に聞き入る参加者

4.　おわりに

この 2 回のブックトークは、2 つの意味で図書館の活動を活性化させたと言える。第 1 に、読書推進活動のひとつのモデルを見いだすことができた。ブックトークという手法は、著者にとっては著作を発信する機会、参加者にとっては直接著者と語る機会として、それぞれに満足度が高かった。また、テーマが学際的であったことから多様性のある参加者が集うことができたことも成果のひとつと言えよう。第 2 に、他機関、学生との連携・協働がある。アジア経済研究所図書館にはテーマと講師の選出、小展示に活用したブックリストの提供を受けただけでなく、職員の交流も深めることができ、今後の連携を強化することができた。「チーム・えんのした」には学生の機動力を活かした広報や運営で力を発揮してもらった。さらに企画運営に携わる良い経験になったという感想を得て、今年度のビブリオバトル協働運営にも繋がる結果となった。

課題としては、当初メインのターゲットとしていた学部生の参加が少なかったことが挙げられる。2 回のブックトークは、多面的な関心を呼び起こす内容ではあったが、学部生の興味やレベルに沿ったものであったかということも問い直し、協働する学生とも意見交換しながら改善を行っていきたい。

今後も社会科学の総合大学という本学の特色を活かし、学生や教職員にとっては学部の垣根を越えて知的好奇心を刺激される機会、また一般市民にとっても本学の知に触れる機会として、ブックトークを継続していく予定である。

最後にこの 2 回のブックトークで講演をいただいたアジア経済研究所の森壮也先生、山形辰史先生、一橋大学名誉教授斎藤修先生、連携・協働をいただいたアジア経済研究所図書館、一橋大学学生団体「チーム・えんのした」に御礼を申し上げる。

---

[1] 第 49 回学生生活実態調査の概要報告
http://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html (2015-1-30 参照)

[2] 江沢美保, 菅原光. 一橋大学附属図書館における学生と連携した読書推進活動. 一橋大学附属図書館研究開発室年報. 2014, no. 2, p. 59-67.
http://hdl.handle.net/10086/26717（2014-1-30 参照）

[3] 一橋大学附属図書館 図書館からのお知らせ (2014-06-09 20:02)
http://www.lib.hit-u.ac.jp/news_detail/n/20140609_2/ (2015-1-30 参照)

[4] 一橋大学附属図書館 図書館からのお知らせ (2014-10-23 8:56)
http://www.lib.hit-u.ac.jp/news_detail/n/20141023/ (2015-1-30 参照)

[5] 一橋大学附属図書館 Twitter
https://twitter.com/hito_lib (2015-1-30 参照)

[6] 一橋大学附属図書館 facebook
https://www.facebook.com/hitotsubashi.university.library (2015-1-30 参照)

[7] 「チーム・えんのした」 Twitter
https://twitter.com/en_hit (2015-1-30 参照)

[8] 一橋大学 図書”環”オープンスペース『えん』
http://ennoshita.kakuren-bo.com/ (2015-1-30 参照)

[Report]

New activities for reading promotion in cooperation with institutes and students

Tanaka, Azusa.

Reference Service Section, Library Affairs Division, Department of Libraries and Information, Hitotsubashi University

Sugawara, Shiori.

Serials Section, Library Affairs Division, Department of Libraries and Information, Hitotsubashi University

Yamamoto, Junya.

Circulation Section, Library Affairs Division, Department of Libraries and Information, Hitotsubashi University

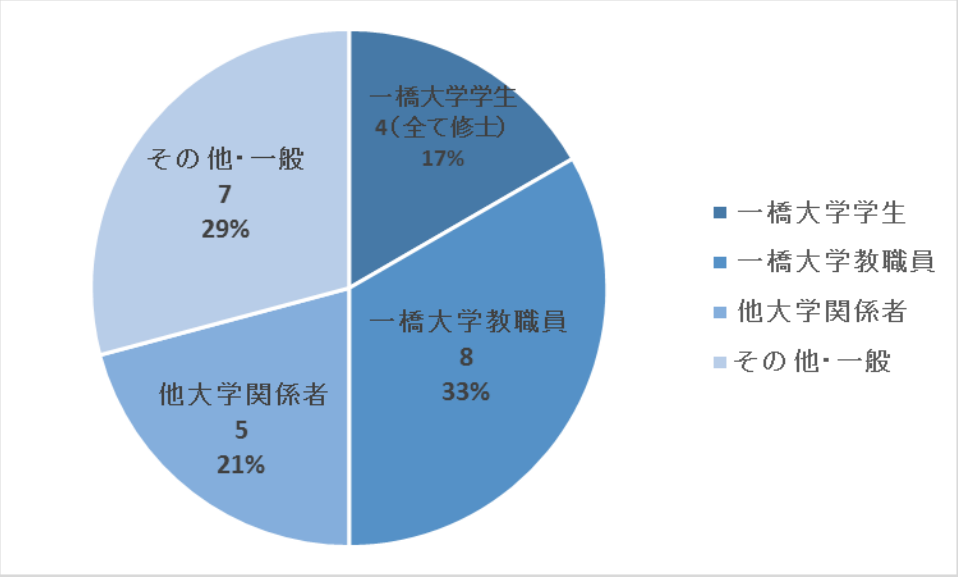
Suzuki, Hiroko.

Academic Services Division, Department of Library Affairs, Hitotsubashi University

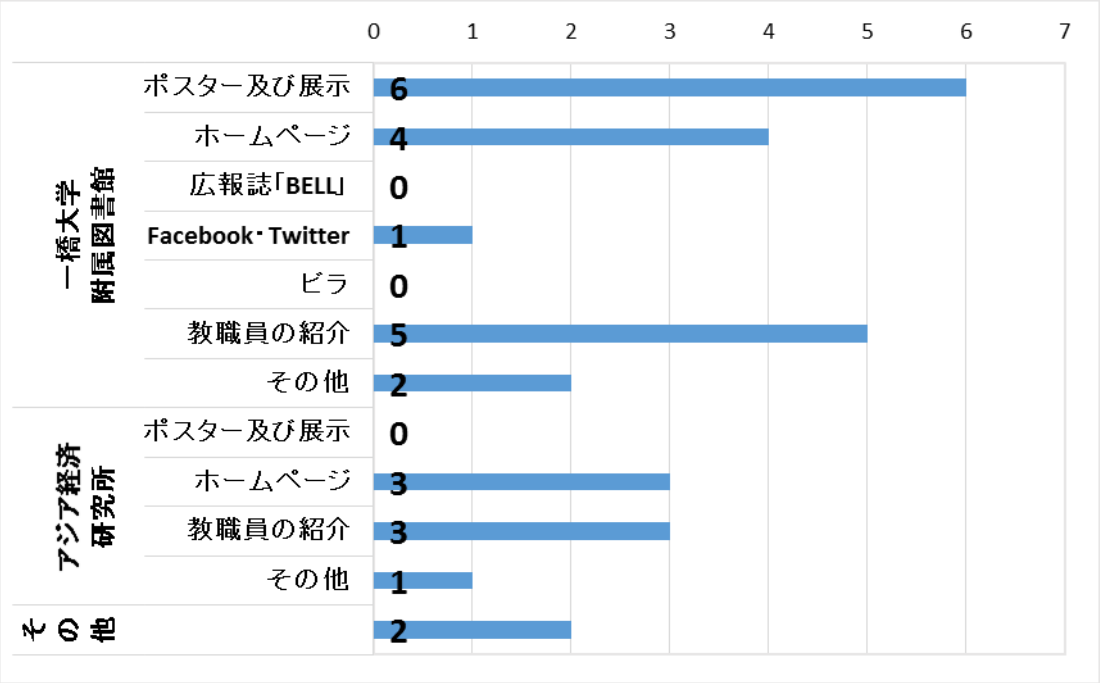
参考資料 1　「ブックトーク・著者が語る『障害と開発の実証分析』」アンケート結果（抜粋）

回答数：24

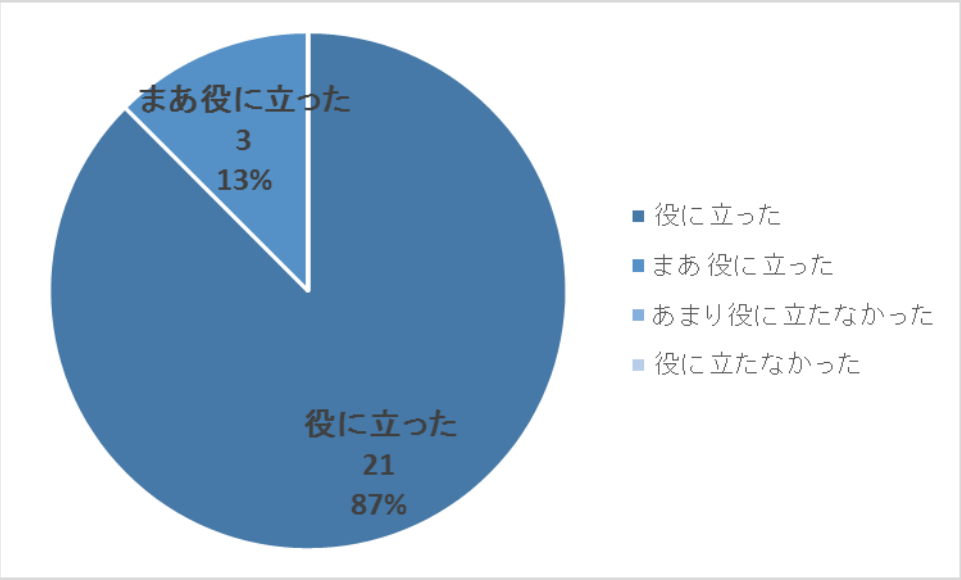
参加者所属



イベント情報取得方法（複数回答可）



・講演会について



意見・感想（一部抜粋）

・「障害」という視点で分析するという方法がいかに重要であるかを考えさせられました。障害と開発についてもっと深く学んでみたいと強く思うようになりました。

・フロアからの質問にも丁寧にお答えいただき、さまざまな疑問が解消されたり、自分が思いつかなかったような視点のご意見・ご質問を伺うことができ大変勉強になりました。

・著者から直接要点の解説がされたので、本の内容がつかみやすくなりました。書籍自体、丁寧書かれた本ですので、良い本ですが、更に理解が深められ良い機会となしました。

・森先生のお話を手話で直接聞けて有意義でした。

その他自由記述より（一部抜粋）

・封筒に入っていた図書リストがよかった。非常に役立ちそう。

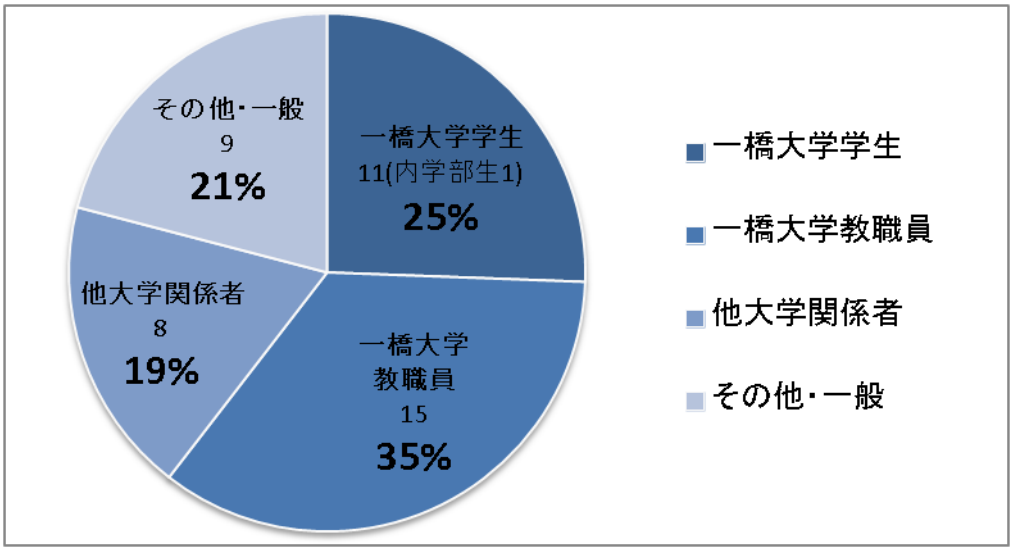
・アジ研は近づきがたいイメージだったのですが、親近感がわきました。大学生でも気軽に使えるようになるといいなと思います。

・手話が存在する講演中に本を回すのはやめて欲しい。見ないなら回せばいいではなく、そのやりとりをしている間に手話が進んでしまい困る。

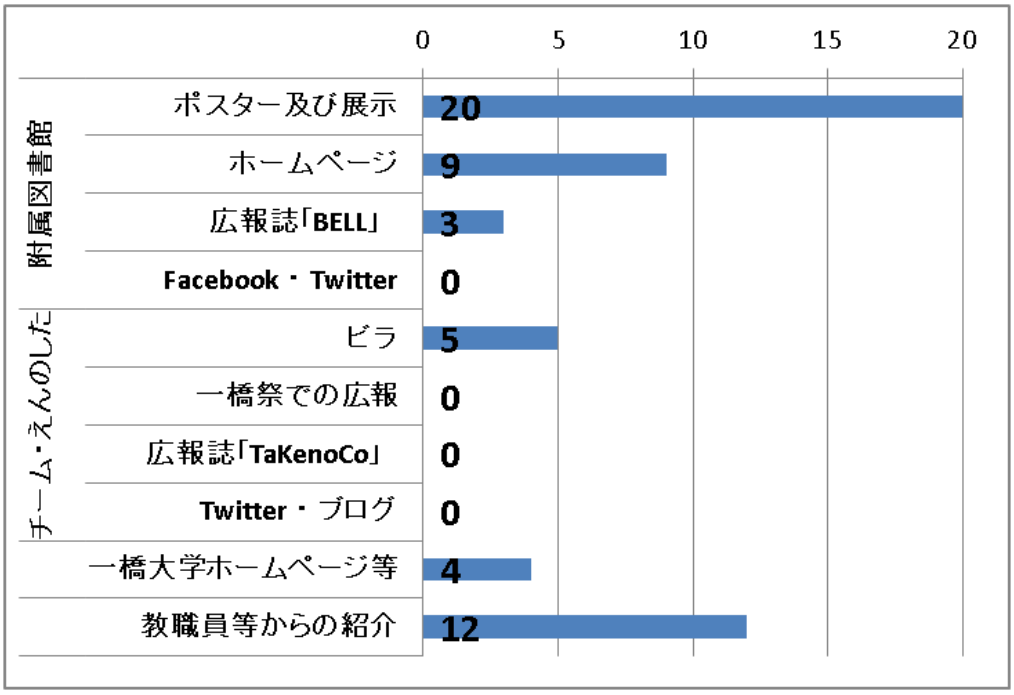
参考資料 2　「環境史へのいざない」参加者アンケート結果（抜粋）

・回収数：43

・参加者所属（アンケート内選択肢による）：

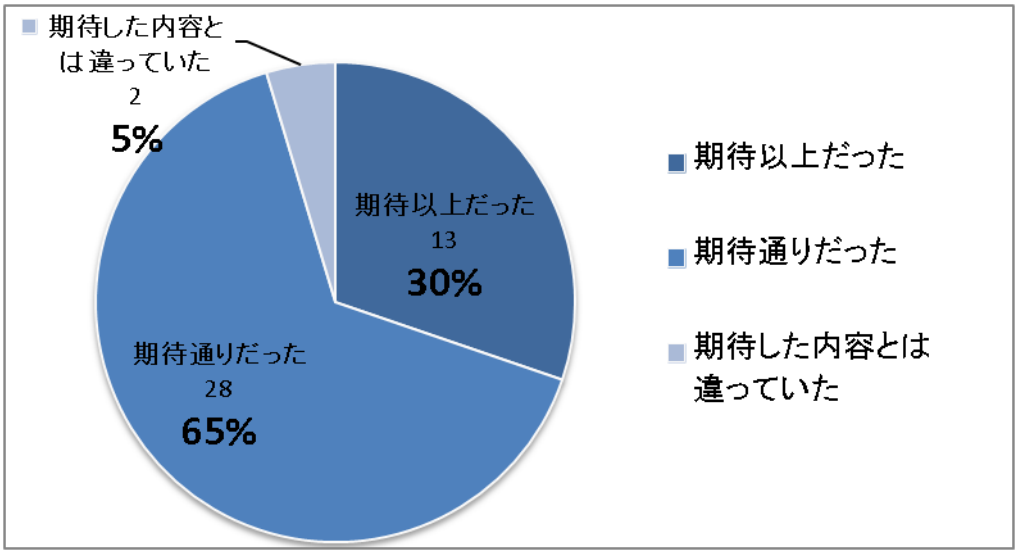


1.イベント情報取得方法（複数回答可）

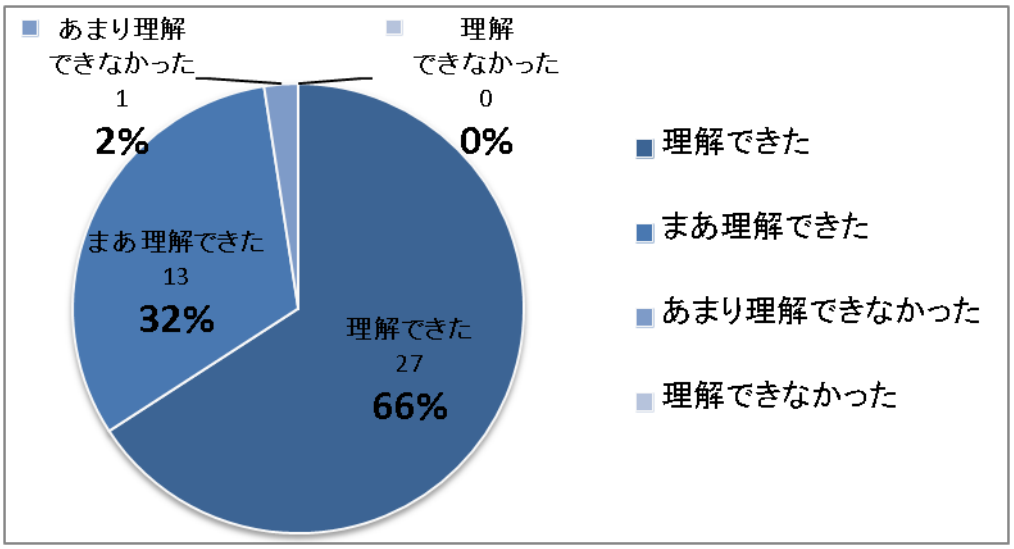


2.ブックトークについて

（1）内容



（2）難易度



（3）意見・感想（一部抜粋）

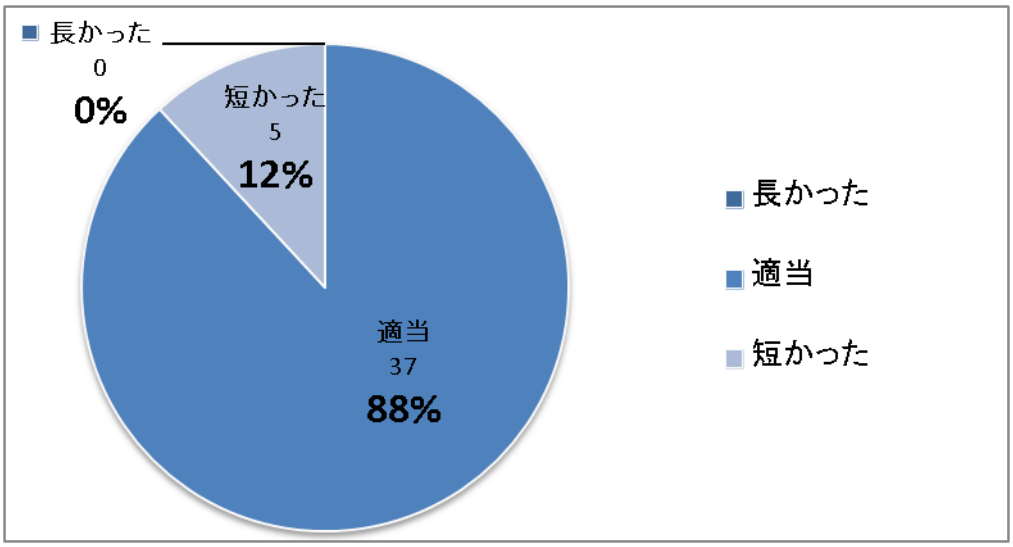
- Book Review は大変素晴らしい試みだと思います。昔は先生方が授業で御自身の研究を本をつかって講義されていましたが、今は教科書中心となってしまい、学生さんがせっかくの先生方のお仕事を知らないことが多いと思います。
- とても解り易い語り口と深い学殖に感心した。本も読んだが、御話を伺い、更に理

解が深まった。大変良い企画だと思う。

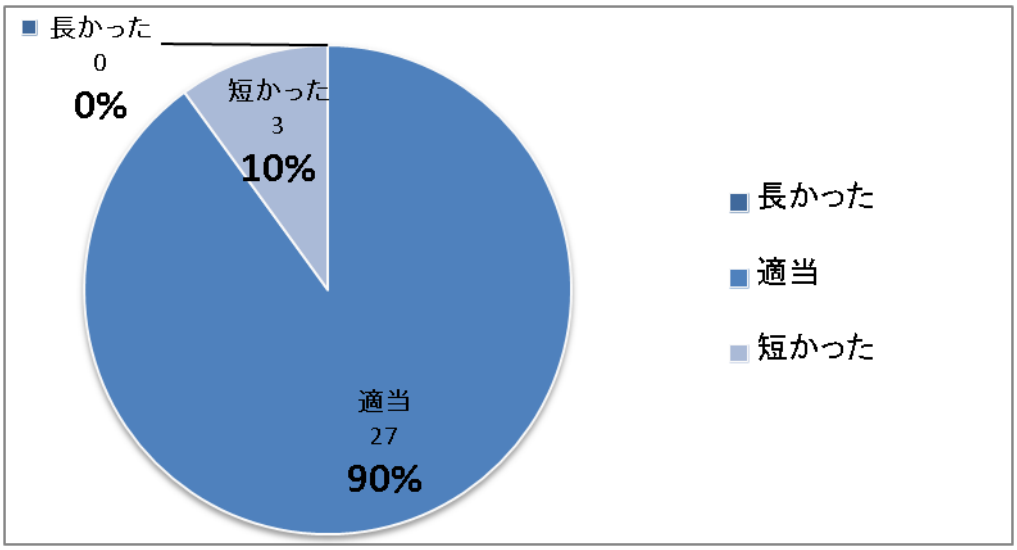
・ 環境史という新しい学問については全く無知であったが、本講演で興味を持つ機会を与えていただいたと思っている。森林の荒廃はひどくなるばかりと思っていたが、日本の長い歴史の中ではそれほどでもないと聞き、少し安心した。

3.構成について

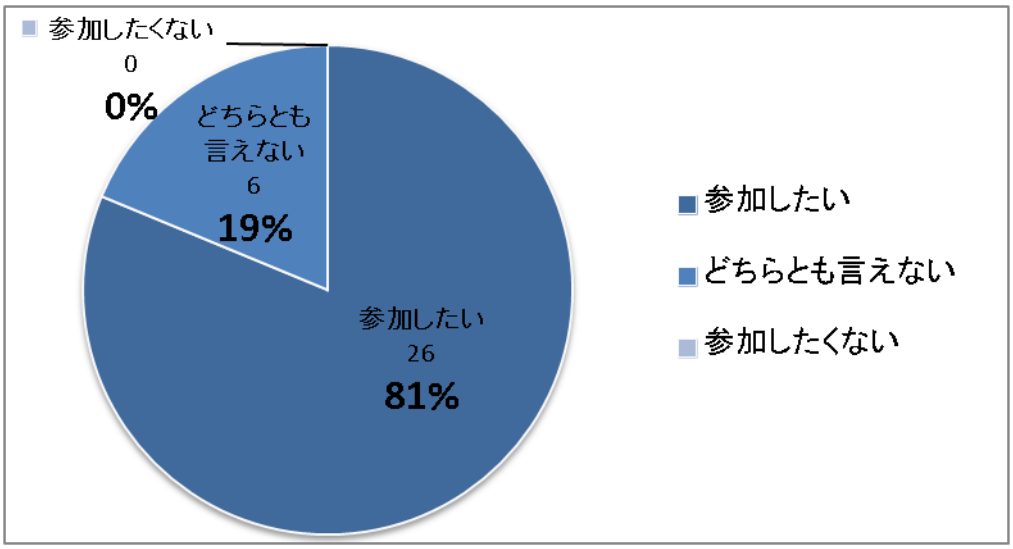
（1）ブックトークの長さ



（2）質疑応答の長さ



4.今後ブックトークが開催される場合、参加したいと思うか。取り上げてほしい分野はあるか。



- 戦後日本の開発主義、資源開発、国土開発。日本近世の民衆史、自然地理。米国の開発政策（特に河川を主にした総合開発）。明治時代土木史。戦中日本、戦争観。
- 橘川教授の電力や石油産業の経済史の本、青島教授の経営学の本、等。
- 経済、政治、実生活に結びついたテーマをとりあげていただいたらどの分野でもうれしいです。
- 学問分野の新しい展開方向に関して。

5.その他気づいた点について

- ボードがあるのはメモをとる上でとても良かった。助かりました。ペンは持っていない人に渡すという形式でも良いかも。質疑の時間も、もっとあってもいい。
- 今回のように、わかりやすく、丁寧な講演であれば、他分野のブックトークでも参加しても良いと思った。
- 質問票システムが良かった。一問一答より効率的、合理的。講師が諸質問をまとめてくれるから。
- 質疑応答によって理解が深まり非常に有意義でした。
- 回覧板とエンピツを配布していただいたのが良かったです。とても良い企画でした。ありがとうございました。